

奈岐也、其實崔氏所舉猪謂家猪、即本草所載豚、今俗呼夫多者是也、本草野猪乃可訓爲源君襲輔仁之誤、以本草野猪訓久佐爲奈岐、非是、而其久佐爲奈岐未詳、王念孫曰、糴有二種、或如猪、或如狗、皆穴于地、中夜出食、人雞鴨、久佐爲奈岐、豈非糴一種耶、又按爲乃志志、即野猪肉也、本草和名引崔氏食經猪、云和名爲乃之者、蓋謂猪肉也、今俗直呼猪爲爲乃志志者、轉譌也、

〔類聚名義抄三〕野猪 クサキナキ

〔八雲御抄三上〕猪

しながどりに、白猪と云、能因説、俊頼云、雄略天皇ぬなのまでかりしたまひける

有、俊頼も不用、凡沙汰外事歟、ふすゐるもなかりき、景行天皇御宇、日本武尊於信の國所見

白猪など云事もあれど、其も異説也、凡如此事説々多、皆不可決定、

〔冠辭考四〕しながどり ぬな あは

萬葉集卷七に、津の志長鳥、居名野乎來者、また四長鳥、居名之湖爾云々、集中こはには鳥の卒とつゞけて、卒とは雌雄ひきゐるをいふ、抑しながてふ事は、既神風の條にいへる如く、かの級長津彦、級長戸邊命は、大御神の息より成給へば、志長と息長オキオガと同じ事也、されば志長鳥と息長鳥とは同じ物にして、息長鳥は鷓鴣ニホトリの事なる也、

〔日本釋名中〕野猪 いかりし、也、し、とは肉也、

〔東雅十八畜獸〕野猪 キ 倭名鈔に本草を引て、野猪はクサキナキ、又兼名苑、方言註等を引て、猪一名彘、一名豕、豚亦作豨、豕子也と註せり、舊事古事等の記に、八十神其弟大國主神を殺さむとして、伯耆國之手向山の本に赤猪ありと云ひて、火をもて猪に似たる大石を焼きて、轉し落されしといふ事見え、古語拾遺には、大國主神の田、蝗のために枯損せしを、片巫眩巫して占はしめ、白猪白馬

白雞をもて、御歲神に獻られしと見えて、猪并に讀てキといひ、また古語古歌にもキと讀みし如きは、皆野猪の事にして、俗にもキノシ、などいひて、家猪をばブタといふなり、野猪をクサキナ